



ヒトラーの演説から時代を考察する

—エスカリエの動画資料を活用した授業案—

元大阪府立高等学校教諭 若松宏英

1 はじめに

筆者は退職教員であるが、これまで普通科で生徒の大半が4年制大学中心に進学する高校をはじめ、ほとんどの生徒が就職する普通科高校や実業高校も経験してきた。そこで、この経験を生かし、『明解世界史図説エスカリエ 十一訂版』（以下、エスカリエ）の「動画でふり返る20世紀の“その瞬間”」等の資料の読み取りで生徒の興味関心を引きつけるとともに、基礎事項を確認しながら、「人を動かす」ツールとしての演説の技術、それを効果的ならしめるメディアを題材にして、考える授業案を提示してみようと思う。

授業時間の不足に悩んでいる学校が多いと思われるので、特設の授業ではなく、普段の流れにのった展開ができるように心がけた。

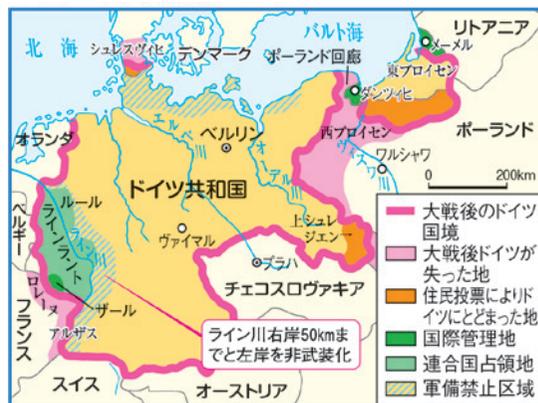
2 授業の組み立て

ヒトラー(ナチ党)は、あの時代のドイツだから台頭した。そのことは繰り返し押さえておきたい。

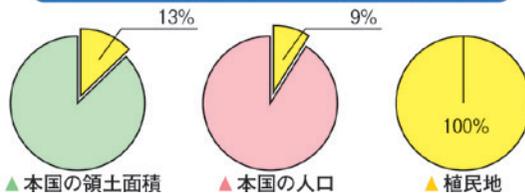
【前の授業までに押さえておくべきこと】

- ・ドイツに苛酷なヴェルサイユ体制（エスカリエ p.174 「ドイツに何もかも払わせろ！」を活用）
- ・政権奪取のための実力行使の失敗（エスカリエ p.175年表「3 1920年代のヨーロッパ」を活用しミュンヘン一揆について解説）
- ・選挙による政権奪取への方針転換（エスカリエ p.180 「ハイルヒトラー（ヒトラー万歳）」のローガンを紹介し、ナチ党が支持を獲得していったことを解説）

前時の終わりにはエスカリエp.215「ドイツでのファシズム台頭」を見て、写真でヒトラーを確認する。次の時間はこのページの動画から始めることを予告して授業を終わる。



ヴェルサイユ条約によるドイツの損失



『明解世界史図説エスカリエ 十一訂版』 p.174 ⑤「第一次世界大戦後のドイツ」と「ヴェルサイユ条約によるドイツの損失」

【教室の設定】

動画を見せるために教室にスクリーンがあることが前提となる。条件が許すなら（教員・生徒がリテラシーに習熟している、時間割で情報の授業とかぶらない等）LAN教室を使いたい。各自のペースで動画を繰り返して見られる、各教員が独自で見つけてきた画像を手軽に見せることができるといったメリットがある。

グループで話し合いをする場合は、授業前に机の配置を変更しておく。なお、無理にグループ学習を取り入れる必要はない。

【本時の授業】

「ワーク」は付録のワークシートの各課題を参照していただきたい。

1. 導入

エスカリエp.215「ドイツでのファシズム台頭」の動画を再生（教科書・エスカリエは閉じたまま）。

2. ワーク①（個人）

ヒトラーについての既習事項の確認である。記入したらグループで答え合わせをする。

3. ワーク②～③（グループ）

ヒトラーの演説や聴衆のようすについて、グループで話し合いながら特徴をワークシートに記入し、グループごとに発表する。

4. ワーク②～③の解説

演説をするヒトラーのきびきびした動作、張りのある声の調子、右腕をあげるなどの特徴について解説し、ラウドスピーカーなしでは聴衆への演説が成り立たないことを指摘する。

聴衆は、ヒトラーの演説に歓声を上げる、右腕を前に突き出す、いっしょに歌を歌うなど、ヒトラーと同じ行動をしていることを指摘し、同一行動により一体感が得られることを解説する（ただし映像は編集されているかもしれない、その場合、歓声などはあとから録音された可能性もある）。

そして、1936年は非武装地帯であるラインラントへの進駐の年であることを指摘する。不公平なヴェルサイユ体制にくさびをうち込むものであった。

5. ワーク④に向けての解説

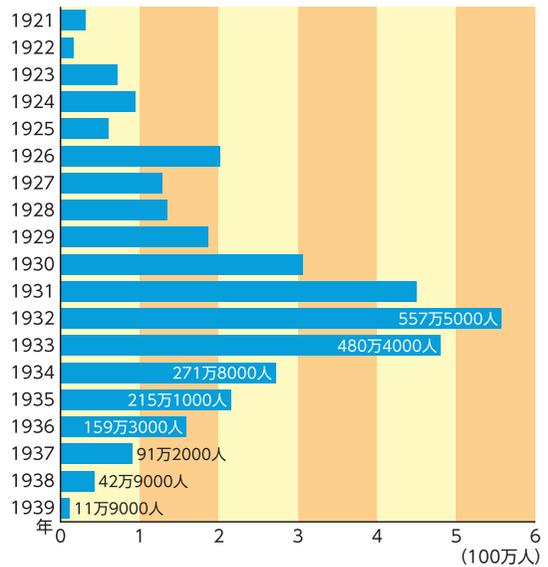


『明解世界史図説エスカリエ 十一訂版』p.180「②フォルクスワーゲン（国民車）の操業（1938年）」
写真：ユニフォトプレス

これまで、ヒトラーが公約をそれなりに実現させてきたこと、それがヒトラーの演説に説得力をもたせてきたことを説明する。とくに景気対策・失業対策について、ワークシートの資料「失業者数の推移」および『明解世界史 A』p.178「ドイツのある職人の証言」、p.179「物にも歴史あり アウトバーンと国民車」等を参照して解説する。

6. ワーク④（個人またはグループ）

ナチ党の実績をふまえ、もし自分が当時のドイツ人ならヒトラーの演説に耳を傾げるか（主張に



失業者数の推移（1921～39年）『ヒトラーとナチ・ドイツ』（講談社、2015年）p.207をもとに作成

賛同するか）、また、その理由は何かをワークシートに記入する。そののち、「自分が当時のドイツ人ならヒトラーの主張に耳を傾ける」とした生徒がどれぐらいいるか挙手でよいので確認したい。

7. ワーク⑤について

ファシズムに限らず、各種団体・グループ（会社・学校・クラブなど）においては、一体感を高める工夫を行っており、それは身近なものであることを確認したい。

8. まとめ

ヒトラーを生み出した社会背景・時代背景、そしてメディアの発達と、それを存分に生かしたヒトラー、もしくはナチ党の戦略について確認する。板書またはPowerPoint®スライドにより、下記の内容を提示する。

年	できごと
1893	アメリカのエディソンが映画（キネトスコープ）を一般公開。第一次世界大戦においてはアメリカやドイツでプロパガンダ映画が制作された
1920	世界初のラジオの国営放送（娯楽音楽放送であった）がアメリカで始まる
1924	ライスとケロッグによってラウドスピーカーが発明される
1932	イギリスで世界初のテレビ定期試験放送（機械式、週4日）開始
1935	ドイツで定期試験放送開始。ベルリンオリンピックのテレビ中継が行われる

9. 指導（次項を参照）

3 注意点：まねさせない

今回のような授業を行う際に、もしくは行ったあとに注意すべきことがある。それは、ヒトラー（ナチ党）を無批判に、場合によってはおもしろがってまねをする生徒が出る可能性である。

数年前、あるアイドルグループがナチ党の軍服を連想させる衣装を着て国際的に批判を浴びた。日本の漫画や映画、ポップスなどがナチスの文化を好んで用いる傾向（いわゆる「ナチカル」）には、国際的に厳しい目が注がれていることを伝えたい。

ファシズム（ナチ党、ヒトラー）の危険性については、ホロコーストとともに扱うことが多いと思うが、今回の授業案のなかには、ホロコーストは出てこない。教科書では、一般的にホロコーストはもう少しあとで扱われている。しかし、授業で静止画よりも印象が強い動画を見せることで、生徒がまねをするようなことにならないよう、ファシズムの危険性についてはこの授業のなかでもしっかりと指導しておきたい。

4 時間の余裕があれば…

近年は、授業1時限が50分とは限らない。筆者が在籍したなかでも65分授業の高校があった。ここまでの内容では時間が余る場合もあると思うので、その場合には関連した内容を扱いたい。

1つ目はメディアによる演出である。エスカリエp.215「メディアによる演出を重視したヒトラー」で取りあげられているのは、有名な聖火リレーである。オリンピック会場に聖火をともすことは1928年のアムステルダムオリンピックから行われていたが、アテネからの聖火リレーを行ったのは1936年のベルリンオリンピックが初めてである。そして、現在でもオリンピックを盛り上げる一大イベントになっている。

なお、なぜ「火」が大切かということについては、生徒から質問が出たときのために、ギリシア神話において人類に火をもたらしたとされているプロメテウスの話は調べておきたい。

2つ目は、当時と現在のメディアの比較である。

more メディアによる演出を重視したヒトラー

ヒトラーは、左の映像のような大衆集会だけでなく、ポスター、ラジオ、映像などさまざまなメディアを駆使することで、大衆から熱狂的な支持を集めることに成功した。こうしたメディア戦略で活躍したのが、ヒトラーから宣伝大臣に任命されたゲッベルス（1897～1945）である。1936年のベルリンオリンピックでは演出の総責任者となり、初めて聖火リレー（写真）を実施するなど、オリンピックを自国のプロパガンダ（宣伝）の場として大いに利用した。またオリンピックの成功により、ドイツ国民の誇りを取り戻す結果にもつながった。▼ベルリンオリンピック



『明解世界史図説エスカリエ 十一訂版』p.215「メディアによる演出を重視したヒトラー」写真：Getty Images

ヒトラーは演説内容を国民に届けるために、どのようなツールやメディアを活用しただろうか。では、IS（「イスラム国」）は何を活用したか、またそれはなぜかといったことを考えさせてみたい。

参考 ICT関係のメディア年表

年	できごと
1995	ウィンドウズ95発売
2004	ミクシィ運営開始
2004	フェイスブック創設
2005	ユーチューブ設立
2006	ツイッターサービス開始
2010	インスタグラム(写真共有アプリケーション)リリース
2016	スマートフォン 日本での普及率71.8%

5 終わりに

初めに書いたように、筆者は現役ではない。よって実践報告ではないが経験を生かして生徒および担当者の個性に応じてアレンジできる案の作成心がけた。活用していただければ幸いです。

【参考文献等】

- ・高田博行『ヒトラー演説—熱狂の真実』（中央公論新社、2014年）
- ・石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』（講談社、2015年）
- ・監督／脚本：デヴィッド＝ヴェンド『帰ってきたヒトラー』（2016年）